

Anthracotheriidae 中に現今置かる *Merycopotamus dissimilis* はインドの上部中新統に出て學者に依りては之れを河馬科中に置く人あり。如斯して河馬は *Merycopotamus* を通じて Anthracotheriidae に關係ある可きと云ふ。

アジアにては上部中新統にバルマのイラワデー溪に於て門齒を各側に三本宛を有する所謂 Hexaprotodont 種の *H. iravadicus* を生ずヨーロッパにてはアジアよりは遅れ下部鮮新統に於て突然 Hexa. 種の *H. hipponensis* を生ず。之れ注目す可き事なり。此の時南部アジア及び北部アフリカ(アルジェリア)に於て之れと同種と思はる可き化石を發見せり。如斯ヨーロッパに突然出現せし河馬は或はアジアよりせしか、果アフリカよりせしか、何れ其一を選ばざる可からず。之れ興味ある問題なれども未だ全く不明なり。

マルレー (MURRAY, 一八六六) に依ればインドに於ては中新統に於て已に門齒各側に二本を有する所謂 Tetraprotodont 種を生ぜしが如し。Hexa. 種より Tetra. 種に變化する時消失する門齒はインドに見出されし或る化石の下門齒と比較するに第二門齒なるが如し。インドの河馬が鮮新統にて全滅せしに反し北部アフリカ(アルジェリア)、南部及び中部ヨーロッパの鮮新統又は洪積統には現今のニール河馬と種類的差異を見認め能はざる Tetra. 種の *H. major* を生ず。アフリカ大陸にては初期洪積統

より後期に涉り *H. hipponensis*, *H. sirenensis* 及び *H. ico-sirenensis* の三種の河馬あり、之れらの内より *H. unnectens* なる現今のニール河馬に關係を有するものを出現せりと云ふ。(青木文一郎)

●日本人に於ける白兒の系圖二例 表第一、

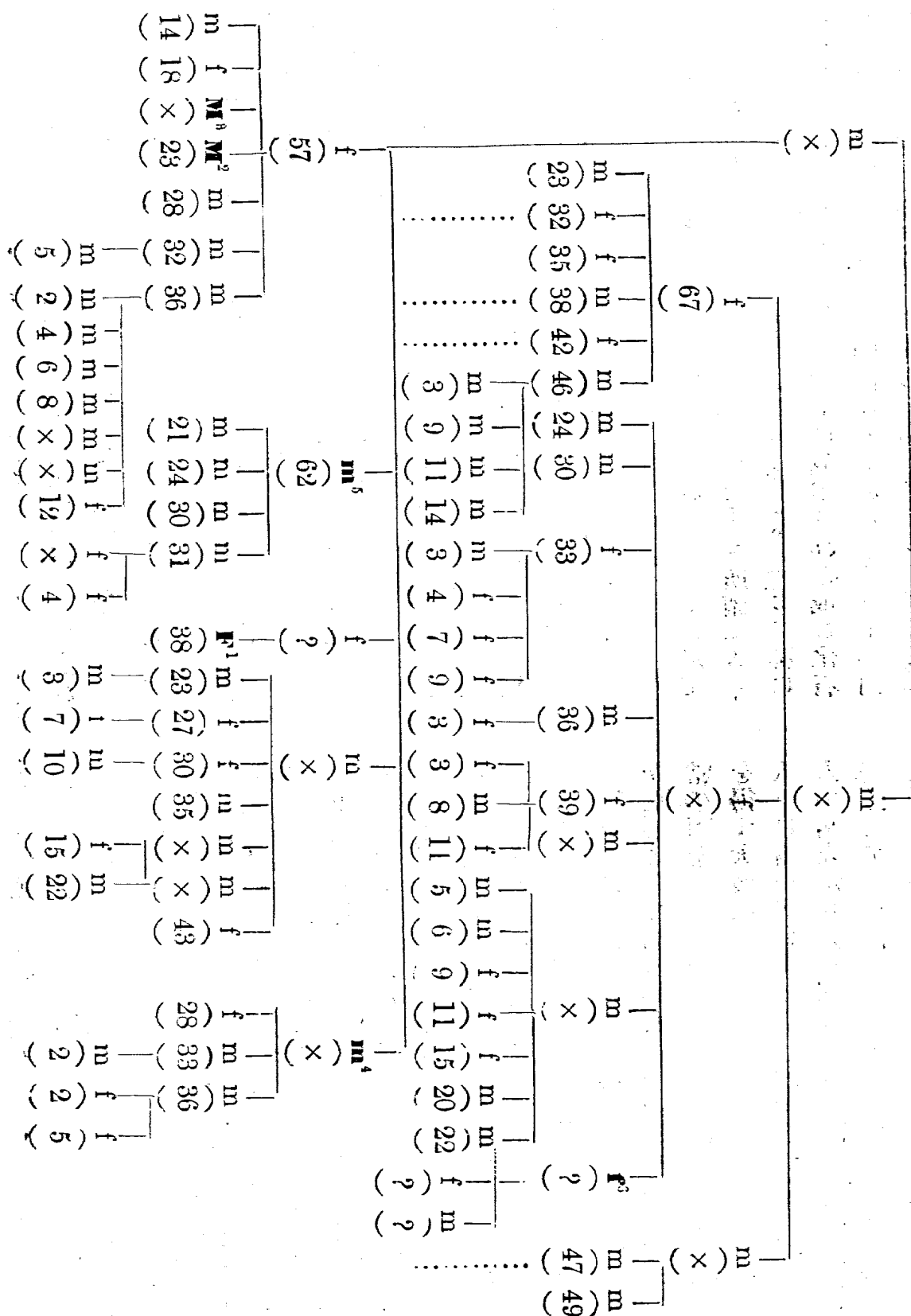
第二は共に鹿兒島縣川邊郡川邊村に居住する白兒の系圖であるが予が之を作るのに用ゐた材料は村役場の戸籍簿と此地方の人々が予の問に答へて直接談した事又は調べてくれた事とである。戸籍簿は誤の無い筈の者であるのに實は事實に相違して居る事が稀ではなく現に表中の白兒の内三人迄も之に漏れて居た位であるから是のみを信する事は出来ぬ。其他に信すべき材料を得る手段としては本人又は其親族等に就いて質問するのが最も良いに違ひないが彼等は自分又は其親族等が白兒であると云ふ事を恥辱として居る故人に聞かれる事を好まず答へても本當の事を言はない事のあるのは予自身経験したから已むを得ず大概は本人と親族等の關係の無い成るべく多くの人々に就いて質すと云ふ法を採つた。此爲には皆で十數人の男女から話を聞き又は取調を依頼し其答を戸籍簿と對照して先づ誤無しと認められる事實を記したのが此表である。表中 m, f は夫々普通性と認むべき男女、m, f は體の何處かに白い斑紋の様な者のある者、M, F は白兒を示し括弧中の數字は明治四十四年の年齢(算へ年)、×は死亡した者、? は生存者であるけれども年齢不詳の

(雜 錄) ○日本人に於ける白兒の系圖二例

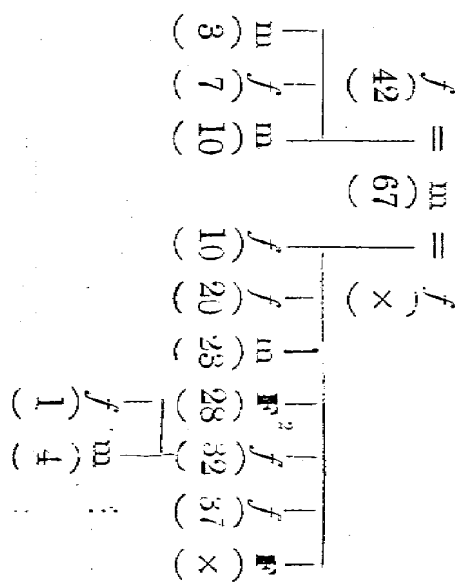
者を表す。尙ほ特殊の場合の外は配偶者を書く事を略し
たが此等は皆普通性の者であるから繁雜になるのを避け

たのである。

第一表



第二表



表中の白兒(1)(2)は何れも川邊村字平山と云ふ處に現に住んで居る皮膚毛髮共に白く(2)は常に強い日光を避ける爲めに頭巾を目深に被つて外出する二人とも未婚者である(2)の弟に今一人白兒(3)のあつた事は確からしいが是れは出生後程なく死んだとの事で知つて居る人は少なかつた又此等白兒兄弟の母の長兄(4)には體の或部分に白い斑紋の様な者があつたと云ふ事を予の聞いた人々の多數は見た事はないが話しには聞いて居ると云ひ中には見たには相違ないけれども古い事で何處に有つたかは記憶してをらぬと答へた人もある。又其弟(5)にも腰部に白い斑紋様の者のある事は確からしく見たと云ふ人が幾人もある。尙此等と稍遠縁の親族の婦人(6)は鬢に子供の時から白髮の著しい群があるさうであるが此婦人は今は此村には居らぬ。

同じ川邊村の字田部田と云つて前例の白兒等の住む平山とは十町位離れた所に現に今一人白兒の婦人(2)が居る。其姉(1)も同じ白兒であつたがこれは大分前に死んだと云ふ事である。(2)は未婚者で外出さへも殆んどせぬ故予も見えた事はない。尙(2)の直ぐ姉は父の妹の子に嫁して表の如く二人の子を産んでをる。

表第一と第二との一族相互の間には少くも近い親族關係は無い。

附記

DAVENPORT 氏夫妻 (American Naturalist, Vol. XLIV, No. 528, 1910.) は近頃多くの白兒の系圖を紹介した後此等より導き得た結論の中に『白兒を産んだ父母が何れも白兒でない場合でも彼等は同じ血統に屬する事が随分ある。それで兩親共白兒でないのに其子に白兒の産れるのは多分久しく劣性として現はれずに傳へられて來た白性が此代になつて兩々相會する機會を得て俄かに再現するのであらう』と云ふ意味の事を述べてをる。予の調べた實例に就いて云ふと第一此村又は其附近に昔白兒が有つたと云ふ様な傳説記錄の類は故老に尋ねても見當らず又此等白兒の父母が同じ血統中の者であると云ふ確かな證據はどれにもない。しかし確かに昔白兒が此邊に無かつたと云ふ證據はなし又此附近は今でも交通の不便な戸數の少ない僻地で他村の者等と縁組する等の事は昔から少ない上に同じ村に居乍ら士族と平民とが結婚する場合

は容易に無い土地で従つて一つの字の殆全體が親族の様な有様と云つてよい位である故彼等が假令近縁の者では無くても多少血統の上の關係があるだらうと想像する事は格別不當とは思へぬ。尙附け足して置くべきは第一表の(1)の場合の外は二つの場合とも一對の夫婦から生れた七人の子の中の二人が白兒でダエンポート氏等も言つてゐる様にメンデルの法則で期待する割合に近似してゐる事である。

(福田卓)

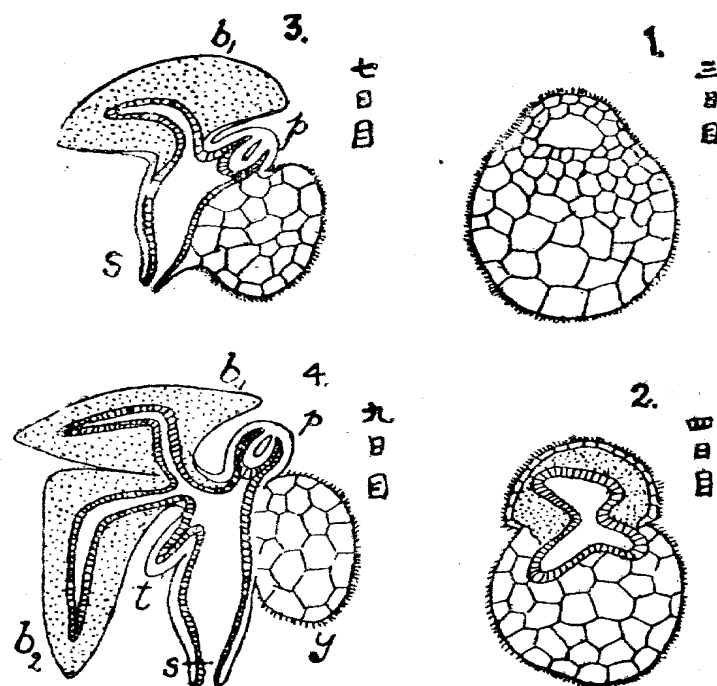
●ヤウラククラゲ科管水母の幼蟲 管水母類

の幼蟲を見たる人は尠かる可し。之れ表面採集網等によりて捕へらるゝこと甚だ稀なるが故なり。左に報告するものは、去る明治四十一年一月余が三崎實驗所滞在中海面鏡の如くに平靜なりし或日の午後二時頃、寄宿舎沖合の處にて表面採集によりて得たる管水母の幼蟲なるが、先人の研究を照合するに其ヤウラククラゲ科 (Agalmidae) の幼蟲なること疑なく多分余が本誌第二百六十七號に記述したるヤウラククラゲの幼蟲ならんと思はるゝを以て、茲に報告することとなしたり。

昔より管水母類の發生を驗し得たる學者甚だ多からざるも、幸にヘッケル、メチュニコフ、クーン等諸氏の研究ありて、二三種屬の發生は略其一般を推測し得らるゝに至れり。而して此ヤウラククラゲ科の包括せらるゝ *Physophorae* 目にありては、ヘッケルが今より四十三年前カナリア島に於て、諸種管水母の卵を人工的に受精せしめ

て其發生を驗したる、實に古今獨歩なる研究ありて、*Physophora* 屬にては二十八日、*Crystallonia* にては二十七日、*Athorbia* にては七日間其發達順序を追跡し得たるは、實に讚歎に値するものとす。但し其詳細なる方法に關しては著者は報告する處なくして不明なりと雖も

第一圖 コヤウラククラゲの卵の發生



管水母の發生を調べるが如き事は非常に多數の新鮮なる標品を捕へ得る様な地に在りても頗る至難の事に屬するものと見

え、後人同様なる成功をなしたるもの絶えてなし。余が本標品に就て其ヤウラククラゲ科の幼蟲なることを確め得たるは、一に右のヘッケルの報告に載せられたるコヤウラククラゲ屬の發生を照合したる結果に過ぎず。

余は説明の便の爲めに、本標品の記述に先ちて、發生